ミルク

椎名りい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルク

【Ｎコード】

Ｎ５２４０Ｃ

【作者名】

椎名りい

【あらすじ】

１６歳の年の差。自分のことを話さない恋人との物語。

第1話

愛してるなら愛してるって言って。

わたしは子供だから恥ずかしくなんかなかった。
好きなら態度で示して欲しいという我儘を受け入れて欲しいだけだった。

「・・・吸う？」
「話逸らさないでください。」
「吸っていい？火、頂戴。」

ライターに火をつけた。
シュボッという音とともに現れた小さな火を、彼の咥える煙草に近づける。
煙が掛かって、顔をしかめた。

「愛してる？」
「うん。」
「・・・ちゃんと言って欲しいんです。」
「どうして？」
「不安になるから。」
「そう。」
「・・・・・」

付き合った当時は、すぐに捨てられるだろうとおもっていた。
何故、１１ヶ月も続いたのか。わからない。

わたしは１８歳、松山さんは３４歳。
年の差　１６歳。

「愛してるって言って欲しいの？それで満足なの？」
「え？」
「無理矢理言わせて、満足するの？」
「別に、無理矢理言わせたいわけじゃないです。」
「いまのはそう捉えられてもおかしくないよね？」
「・・・ごめんなさい、ただ、」
「満足ならいくらでも言ってあげるよ、
でも、そういうのって滅多に言っちゃいけないんじゃない？」
「言っちゃいけないの？」
「愛してるって言葉は大事に使わなきゃいけないんだよ。」

松山さんの言うことはいつもよくわからなかった。
どうして愛してるをたくさん言ってはいけないの？
大事に言えばいいんでしょ？

わたしはいつだって大事に使ってるのに。

「松山さんだって、大事に使えばいいじゃないですか。」
「侑佳(ゆか)に？」
「うん。大事にたくさん言って欲しいです。」
「・・・そんな簡単に言えないよ。」

松山さんはわらって煙草を吸うだけだった。
わたしは煙の逝くほうをじっと見つめていた。

今日は雨だった。

「煙草変えましたよね。」
「ああ、うん。」

１１ヶ月間、一回も変えたことなんかなかったのに。

「どういう心境の変化？」
「いつものが売り切れてただけだよ。」
「自販機なんかどこだってあるじゃないですか。
全部売り切れてたんですか？」
「うん、どっかのヘビースモーカーが全部買ってったんじゃないのかな。」

「うそつき。」

いつもと違う匂いに途惑ったわたしは、
窓を開けて新しい空気をたくさん吸った。

第2話

昨日はあのあとすぐに帰った。
松山さんは送ってくれなかったけど、傘を貸してくれた。
これが次会うときの口実となる。

松山さんは、いつも会うための口実をつくってくれる。
会いたくないときは口実をつくらない。
会いたくなったら、気が向いたら、わたしに連絡をくれる。

「それって遊ばれてるだけじゃん？振り回されてるんだよ、侑佳は。」
「・・・そんなこと、ない。」
「侑佳はそう思っててもさ、現実見てみ？１６歳も上の人だよ？」
「つり合うわけないってわかってるよ、もしかしたら遊ばれてるのかもしれないし。」
「そうだよ。侑佳は可愛いんだからあ、新しい彼氏すぐできるって！」
「そんなことないと思うけど。真依（まい）はいいよね、タメだもん。」
「実はさ、直哉（なおや）の友達で、侑佳のこと気に入ってる人いるんだ。」
「うそお？」
「松山さんと別れて、付き合ってみれば？タメがいいよ。」
「・・・試しに、会ってみることってできる？」

そうしてわたしは、今日、真依と真依の彼氏の友達と会うことになった。

「こんにちわー、初めましてー！晃（あきら）です！！」
「初めまして、侑佳、です。」
「よろしくねっ、会ってくれるって言ったからさー、嬉しくて！」
「テンション高いね、わたしも嬉しい。」
「あ、もしかして聞いた？俺が、侑佳ちゃんに気があること。」

わたしは作り笑いで頷いた。

「まじかよー・・・真依ちゃん！言うなってゆったのに！」
「あはは、ごめーん、だって侑佳がさあ、彼氏とうまくいってないみたいでー・・・ね？」

こっちに振られても、困る。
苦笑いで真依を見た。真依が「ごめん」と笑いながら言った。

晃くんに約束の電話をしたあとのこと。

真依に、
「晃くんに全部話しちゃえば？」
と聞かれた。
わたしは軽く頷いて、
雑誌にのっていた可愛い服の話にすりかえた。

「あのね、この子いま１６歳も年上のオジサンと付き合ってんのー。」
「まじ！？そーなんだ・・・。」
「でもさあ、侑佳相手にされてないの、ってか、振り回されてるだけなの。」
「なにそれ、可哀想！」
「だしょー！？だからねー、晃くんっていういい男の子紹介してあげるってゆったの。」
「そっかあ。ねえ侑佳ちゃん、俺に乗りかえちゃえば？大事にするよ！」
「ほら、ね？侑佳、松山さんと別れて晃くんにしなよ、どう？」

「・・・あのさあ。」

わたしの一言を待つふたりの目は、キラキラしていた。

「ごめん。わたし松山さんと別れる気ないから。それとオジサンとかゆわないで？」
「へ、？」
「わたしこんな軽い男と付き合わない主義なの、ってか松山さんとはそんな簡単に別れられない！あと！」
「・・・はい？」
「おまえらのキーキー声、まじうざいから！」

わたしは千円札をテーブルに叩きつけて席を立った。
頼んだ紅茶はまだ来ていなかった。
店を出るときに小さく聞こえた、
真依の「ごめん、いつもはあんなんじゃないんだ。」という苦笑いまじりの声が聞こえて、無性に虚しくなった。

千円無駄したな、という馬鹿馬鹿しいことを思いながら、帰り道を歩いた。
雨が止んだばかりの道路は、黒くて静かだ。

松山さんに、会いたい。

第3話

びしょ濡れのベンチに座って携帯を開く。

真依からの着信が6件、メールが4件。
晃くんからの着信が3件、メールが1件。

全部シカトした。

ただ、松山さんからの連絡を待つ。

「まだかよ。」

小さく呟いた。
その声は薄い空気にさらわれて、消えた。

アドレス帳の　松山紘紀（ひろき）　という文字を指でなぞった。
通話ボタンを押す。

冷たい機械音だけが響いて耳に残った。

「つながらない。」

わかっていたけど、少し、いや結構辛かった。

この公園に来て、ベンチに腰をおろしてから2時間が経った。

相変わらず暇だ、だからって真依や晃くんに連絡する気もない。
わたしは諦めて携帯を閉じた。
携帯に貼ったプリクラは色褪せて剥がれかけている。
小さい四角の中で笑う、わたしと真依がいた。

ビッ・・・

そっと、破れないように剥がした。

「もう、疲れちゃった。」

わたしはベンチを立った。
服が濡れている、気持ち悪い。

家に帰ろうと、歩き出した。

ピルルルル、ピルルルル

『松山紘紀』

「もしもしっ！」
「ごめん、電話出れなくて。仕事中なんだよね。」
「こ、こっちこそ、ごめんなさい。傘、返そうと思って。」
「ああ、そっか、じゃあ・・・いつ暇？」
「わたしはいつでも。あ、昼間は学校だけど。」
「・・・今日俺ん家泊まる？」
「え、でも明日学校ですよ。」
「朝そのまま学校行けばいいじゃん。」
「噂流れたらどうするんですか？」
「隠すことないでしょ、隠したいの？」
「・・・別に。」
「じゃあいいよね、８時頃には家いるから、おいで。」
「はい。」

お泊り、だって。

初めてだ。

煙草を買った、松山さんの、いつものやつ。

そして走り出した。

「こんばんわ。」
「おお。」
「ほんとに泊まっていいんですか？」
「いいよ、傘持ってきた？」
「はい。あと、これ。」
「え、煙草じゃん。」
「マルボロ、今日は売り切れてなかったですよ。」
「・・・そうなんだ。」
「何で煙草変えたんですか？」
「ほんとに売り切れてたんだよ。」
「嘘だ。」
「本当です、早く入りな。」
「・・・お邪魔します。」

部屋は相変わらず綺麗に整理整頓されていた。
というか、物が少ないから汚くしようがない。

「侑佳のコーヒーが飲みたい。」
「いいですよ。」

コーヒーはいつもわたしが入れる。
侑佳の淹れたコーヒーはうまいね、って優しく笑ってくれるんだ。
普段笑わないから、すごく嬉しい。

お湯を沸かす為に、やかんに水を入れてコンロに置いた。
ふと振り返ると、松山さんはこの前の煙草の箱を丸めてゴミ箱に投げて、新しいのを吸い始めた。
だいすきな匂いだった。

「はい。」
「ありがと。」

新婚さんみたいだねー、
なんて笑い合えるはずもなく、ただふたりで並んでコーヒーを飲んだ。

わたしはミルクと砂糖多め。

テレビの音が煩く感じた。

バラエティ番組はエンディングを迎えていた。

「侑佳。」

「ん？」

「侑佳ってもう、結婚できる歳だよな。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5240c/

ミルク

2011年1月22日03時00分発行